

私にとって版は「セイブツ」 ー村上早と銅板ー

村上らは自らが専門とする銅版画の技法を以下のように説明する。
「腐食は腐敗であり、版上の傷は人体と心の傷、紙に刷り取れる
インクは血である。」

(『画廊からの発言 新世代への視点 2016』東京現代美術画廊
会議、2016 年)

また、2019 年に開催された上田市立美術館での個展の際には、
そこからさらに発展し、「銅の版は ‘人の心’、付ける傷は ‘心的外傷’、
傷に詰めるインクは ‘血’、それを刷り取るための紙は ‘ガーゼ、包
帯’」とも語っている。

(中村美子「ネガティブを昇華させる村上早の強さと覚悟」
『gone girl』2019 年、74—75 頁)

村上と話をしていると、最終的な作品として刷られた紙よりも、
むしろ銅板自体が彫刻作品なのではないかという錯覚を受ける。
村上の作品を語る時、必ずと言っていいほど、彼女が 4 歳の時に
受けた心臓病の手術の話が出てくる。その手術によって受けた精
神的恐怖のせいで（おかげで）、大人になるまで夜から朝の境界
が怖くて、家族と同じ屋根の下でなければ、朝を迎えることがで
きなかつたという。東京の大学に進学した後も、学校のアトリエ
で早朝から夜まで作品制作の作業をしていても、かならず高崎の

自宅に帰宅することはかかさなかった。この夜への恐怖は、幼い
頃に傷ついた心のなかに常にトラウマとして存在したのだ。

大学 3 年生の時に偶然に銅版画という技法に出会い、作品を制
作するようになると、少しずつ銅板と自分自身を重ね合わせるよう
になる。ただ、それはぴたりと合うものではなく、ある種の共依
存的な存在ともいえる。銅版画は、村上がいなければ作品として
存在しないが、村上自身も銅版画に依存している。村上はこうも
述べる、「銅板は、常にそこにいて、手を差し伸べてはくれないけ
れど、手をつかんでくれというと、手をつかんでくれる」。彼女が、
幼少期のトラウマと共に生きていく覚悟ができたのは、きっとこの
技法との出会いによるところが大きい。銅板に傷を刻むことで、
彼女自身は確実に治癒されているのだ。



村上のアトリエに大切に保管されている銅板たち